

# 第一〇章 中割校区

## 第一節 中割校区の概要

種子島のほぼ中央に位置し、市街地から約二〇キロほど離れた遠隔・山間地で、十六番・万波・生姜山・千段峯の四集落から成る。大正三年（一九一四）の桜島大正噴火で罹災した方々の移住などにより中割の地が興され、平成二十六年（二〇一四）に廃校になった鴻峰小学校も、大正三年の十一月に建てられた。昭和三十年代頃までは炭焼き（木炭）などで隆盛を極めていたが、バブル期の終焉とともに地域力の低下が進んだ。



図8-26 中割校区の位置

近年においては、過疎化・高齢化・少子化が進み、昭和三十

年（一九五五）頃には一〇〇〇人近くあった人口も、令和五年（二〇二三）十一月末現在では四七世帯・六六人、未就学児一人・小学生一人・中学生〇人・高校生〇人、高齢化率は約五〇％となり、逆ピラミッド型の人口構造を呈している。

専業農家は五戸ほどで、令和四年四月には株式会社ウルトラエックス社が業務を開始した。

昨今の主な活動として、高齢者活動の促進に取り組んでいる。老人クラブを「楽笑会」と改称し、「みんなが楽しく笑って過ごすことで、心も体も元気になろう」ということを願って命名した。さらには役員の若返り化も図っている。健康づくり＋楽しみづくり（健康寿命づくり・豊かな人生づくり）や毎週木曜日の活動（血圧測定などの健康チェック・体力づくり体操）、スポーツ活動・花壇づくりなどの環境美化活動、クリスマス会などの娯楽・交流活動も行っている。近隣地区の砂中（中種子町）集落民とは合同で地域活動を行ったり、立山校区民と交流したりしている。交通手段を確保するための市からのリース車両による送迎や買い物支援（平成三十年から生活必需品の委託販売開始）、高齢者見守り、ホームページの開設、特産品づくり（地バナナの試験栽培等）、来訪者向けの体験活動メニューづくりも行っている。食農セミナーは、毎月一回ペースで令和元年十一月スタートし、特色ある地域づくりの取組みとして集落支援員主導による押し花教室の開設や地場産品を活用した郷土食のレシピづくり、豊富な山野草の活用による中割の魅力発



「楽笑会」活動の様子

信なども行っている。

目指す仕組みづくりとしては、次の三点が挙げられる。

- ・このみね館運営の安定化と稼働率のアップ
  - ・中割応援隊の組織づくり
  - ・農産物を主体にした地場産品の販売
- 昨今の課題としては、次の三点が挙げられる。

- ・集落再編
  - ・後継者育成
  - ・地区の長期計画策定
- 究極の目標は、校区民の満足度をアップさせることである。

## 第二節 中割校区の成り立ち

鹿児島県が出版した『桜島大正噴火一〇〇周年記念誌』によると、大正三年（一九一四）一月十二日に始まった桜島の大噴火は、大量の火山灰や軽石・溶岩が噴出し、幅四〇〇メートル・水深約八〇メートルの瀬戸海峡を埋め尽くし、対岸の大隅半島と陸続きとなり、五集落七〇〇戸が焼失するなど、日本が二十世紀に経験した最大の噴火と記されている。想像しても背筋が寒くなるような恐ろしい出来事によって、土地・家を失い、復旧が困難な三〇〇〇戸余り約二万人が移住を余儀なくされた。

移住の先陣を切って、西桜島の横山及び赤生原集落（現在の鹿児島市横山町及び赤生原町）の三〇〇戸一八一人が中割十六番に向かい、最終的には中割校区に二〇六戸一三三〇人が移住した。

現在は近くに種子島空港が開港（平成十八年〔二〇〇六〕三月）したことによって、尾根づたいに走る県道も整備されているが、移住当時は原始林状態にあり、「田畑の開墾・住居の準備など辛苦の極みであった」と記されている。

近くの県道沿いの丘には月讀神社（桜島に現存する神社と同名）を建て、事あるたびに集まり故郷を偲んだと言われており、現在も地区民の拠り所として守り続けられている。

移住した人々は地区民と協力し田畑を開き、炭焼きなどにより隆盛を極め、中割の礎を築いてくれた先駆者であった、と伝

えられている。

また、当時の人々は文武に卓越し、特に、スポーツ分野においては県下にその名を轟かせていたという。

『西之表市の伝説』（下野 一九六五）に、「中割の発展」という記事があるので、以下に引用して紹介する。

大正三年一月十二日、桜島噴火により県が北種子村に命じて部落移住地を指定した。桜園、平松、二本松、十六番、中割、千段の峯などに分散収容した。全体で二三七戸、一三八九名にもほった。大正三年三月二十四日、中割におよそ一五〇戸の移住民が来住した。しかし学校を直ちに造ることもできず、子供たちは古田、星原、立山などの学校に出した。中割の人たちははじめ五つ位の長屋の掘立小屋に住んでいた。彼らは県から割りあてられた国有林にクワをふるい開墾していった。一戸一六アール程ずつ割りあてられた。そして一枚一枚、畠を作っていった。大正三年十一月十六日には、県、郡、村当局の同情によりついに鴻之峯小学校を建てた。二学級であった。その後、努力によって生活も一応安定してきた。当時、中割は安城区内の一部落として、世話人の指導下にあった。それを南種子の平山生まれで、十六番に移住していた向井喜之助氏の努力により、安城区から独立、中割区が発足したのであった。昭和八年のことである。

昭和二十四年、学校は新築された。昭和三十年には定期

バスも運行し、昭和三十二年には電灯も灯った。ところで昭和三六年現在、中割校区の人口は八百余名、百数十戸、大半は製炭との兼業農家である。出身地別に見ると、奄美大島郡出身が六〇割、桜島一二割、甌島一割、熊毛郡内一七割、その他一〇割となっている。



鴻峰小学校舎移転改築落成記念（昭和27年）

第三節 地名・字名

一 地名

中割

本市と中種子町との境界線上に、県道が割り込むように通っていることから、「中割」と名付けられたのではないかと、校区では言い伝えられているが、記録がなくはつきりしない。『中割史の記録』によれば、中割校区にある四集落の地名の由来は次のとおりである。

十六番

県道を作る時、西之表の方から番号を付けて工事をしたその名残で、二十番まである。

万波

入植前から付けられていたため、はつきりしたことはわからないが、「万波」はもともと「万葉」と書いて使っていたという。

生姜山

移住当時は、ここにたくさんの生姜を植えていたので、ほかの集落の人が「生姜山」と呼ぶようになり、この人々もそう呼ぶようになったといわれている。生姜は食用あるいは出荷品



生姜山の生姜畑



生姜山の生姜

としていたと考えられる。

千段峯

この地には「せんだん」の木がうつそうと生い茂っていた。そのため、「千段峯」と言う名がつけられたのではないかとされている。

二字名

大字

安城

『昔の安城村・安城歴史』によると、安城村は安城・立山はもちろんのこと、浜津脇・牧川・草の木・上之城・坂本を支配

し（周囲一二里余り）、種子島では、赤尾木、野間に次ぐ三番目の大村だった。と、記されていることから、中割の全域もその支配下にあつたと考えられる。

#### 小 字

#### 中 割

地名の中割に由来したものと思われる。

#### 三本五葉

大山久男氏によると一帯に三本の五葉松の巨木があつたと言われ、切り株も確認できたという。

#### その他

「奥嵐」「川俣」「野木小野」については、詳細は不明である。

### 第四節 歴史的特殊性

中割の歴史は、数々の移住の歴史でもあり、桜島大正大噴火による大移住をはじめ、奄美諸島・鹿児島・宮崎・四国・遠くは北海道からの移住などもあつた。

中でも、大正三年（一九一四）の桜島大正大噴火による移住後の鴻峰小学校沿革の記述では、次のように記されており、中割の大きな歴史の始まりとなつた。

○大正三年一月十二日、桜島噴火ニ依リ県ハ西之表町ニ命

ジ計リテ部落移住地ヲ指定ス、町内桜園 桃園 平松

二本松 十六番 中割 千段峯ヲ以テ移住民ヲ収容セリ

○大正三年三月二十四日、当中割ニ約百五十戸移住民来住

学校造営ヲ直チニナス能ワズ、古田校 星原校 立山校

二児童ヲ依頼シ 以テ教育ヲナス

○大正三年十一月十六日、県郡町当局ノ同情ニヨリ学校ヲ

建築ス 経費ハ総テ県費支出トス 当時ニ学級編成 初

代校長 大八木氏（熊本県出身）ナリ

○大正四年三月二十四日 第一回卒業証書授与式举行

第五節 移住

十六番集落の県道沿いに、桜島大正大噴火による移住記念碑がある。そこに添えて設置している「桜島移住中割史一〇〇周年記念碑」には、次のように刻まれている。

大正三年桜島の大噴火により桜島をよぎなく移住しなければならなかった当校区民が、望郷の気持ちをこめて建てたものである。当時原始林であった当地区に二〇六戸一三三〇人が専ら林業（炭焼き）を主として生活していた

以下に、種子島高等学校郷土研究部発行の『種子島研究』第二十号から、碑文及び当時の聞き取り情報を引用する。

十六番（鴻峰）部落

話者 池田フイ（生年 明治三八年 年齢七七）

移住記念碑

正面

大正三年三月十二日

移住記念碑

熊毛郡長中山春美書

右横

郵便局長広瀬平九郎

左横

小林区署長

川村恒次郎

警察署長

宅間軍治 宮之浦七郎

巡査 浮辺庄助 中村安助 山口幸之丞

校長 大八木末治

職員 河内時中

国生イク

鶴田一郎

医者 桜井景助

移住戸数 二百三十八戸

人員 千三百八十九名

発起人総代

野原弥吉

会計

渡辺道丸

林吉太郎

裏

元知事 谷口留五郎 知事 高岡直吉

内務部長 服部教一 熊毛部長 中山春美

鹿児島県技師 高原道生

技手 牧瀬彦吉 大西清一 春成才之丞

茂山岩次郎

熊毛郡一課長 八板正二 河内英蔵 下村時緝

榎原直志

八板時彦 大山松彦

北種子村長 河東祐五郎 村長 上妻宗周

助役 名越高秀

梟技手 益田喜次郎 郡山通行 黒田信吉

畠山良太郎

中種子村長 西田伝二 平瀬武雄 阿世知一彦

羽生理丸 河野涼志 熊沢助次郎

移民団長 野原弥市 会長 野口蔵吉

藤崎虎吉 木村正十郎 藤崎金之丞 岩崎

伝蔵

川畑彰 藤崎与吉 野口熊曠 有村武

熊

原田猪之吉 大里善曠 前田虎吉 岩元虎

吉

林吉太郎 森山九二 野口熊助 横馬場

末吉

中原熊吉 山下重太郎 原田七之丞 横山

虎雄

原田猪之助 長谷熊曠 野口小熊 折田次

助

野原遙 浜崎六助 野口虎吉 山下市

太郎

岩元乙助 川崎半兵エ 赤尾虎吉 横山虎

雄

立山熊吉 岩崎小喜 河野庄之助 中村直

次郎

安達作次郎 逆瀬川矢熊 石堂静三 中溝

七郎

富松虎吉 石井又三 坪坂源四郎 藤崎直

吉

原田新兵エ 川畑栄吉 大崎矢之助 野口

勘助

山下小八 野上曠熊 山田甚五郎 平之内

安太郎

糠末吉 全ケサマツ 大崎惣平 村山盛

人

有村貞夫

入植時の事情

大正三年一月十一日、一週間前から起っていた地震がこれまでに大きくなり、翌十二日の朝方、当時小学二年生の池田フイ(旧姓浜田)さんたちは、いざというときのために浜へ出ていた。そして、同日の大爆発



桜島移住記念碑

とともにフイさん一家十二人は、自分たちの漁船（長さ約六メートル・幅二メートル）に乗り込み避難した。このとき鹿兒島より救助船が二・三度行き来をしたが、船に乗りきれず泳いで不気味な噴煙をあげ怒り狂う桜島をみて、その恐怖をひしひしと感じたにちがいない。

フイさんたちは、鹿兒島の小学校に避難した。そこで夕飯としてにぎりめしが配られ、それを食べ終ったとき突然、大地震と噴火が起った。学校の石垣が崩れたり、地割がおこったため、鹿兒島の人々もいっしょに近くの神社に逃れた。翌日人々は、種子島・朝鮮・宮崎の小林などへ分散していった。フイさんたちは、伊勢でしばらく滞在し、県の斡旋で種子島への移住を決定した。

人々は、種子島へ向かった。西之表に着くと人々は、鍋釜を背に、二十キロメートルの山道を通って中割へと向かった。ぬかるみと山ヒルに悩まされながら半日も歩き、到着したのは、もう夕方であった。ようやく「新天地」に着いたものの、そこは生い茂る原生林と竹で編んだ掘っ立て小屋だけだった。掘っ立て小屋は八棟まであり、フイさんたちは二号に住むことになった。もちろん電気はなかったので石油カンテラを使用し、炊事場・便所も共同で水は谷間へくみに行った。

しばらくして、十六番から平松・屋久川・鹿之峰・千段之峰・大枯木へと約百戸が分散し、約三十戸が十六番に

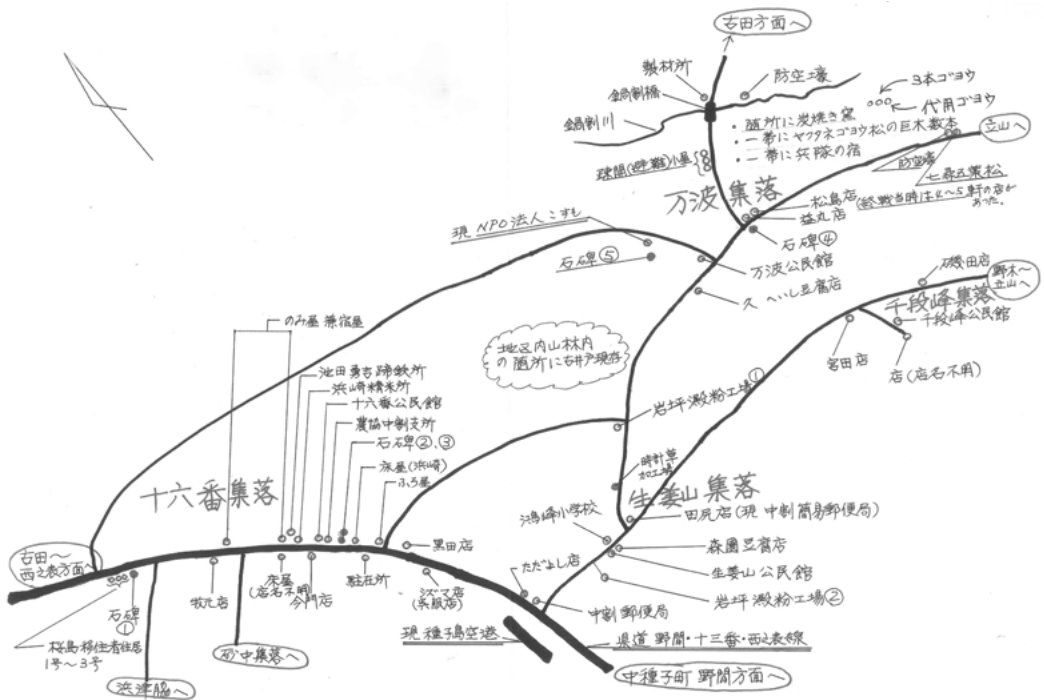


図8-27 思い出の中割

残った。

衣料・食料は県から配給してもらい、家族の人数に応じて畑地（七・八反から一町）も与えられた。畑地というよりは、ただの荒地であった。中には、前途を悲観した人が首をつって自殺したり、鹿児島に逃げたりもした。しかし、人々は団結し、荒地を山鉾で開墾し、次第にさつまいも畑へと変えていった。

その年の十一月には、移住者の手で開墾地の真ん中に、二学級の鴻峰尋常小学（移住児童数男八二・女七四）を開設した。しかし高学年は浜津脇（星原）や古田の小学校へ通い、幼い弟や妹を背負って登校していた。その上に他の生徒たちからいじめられることもしょっちゅうであった。このような中でも立山・安城・鴻峰・古田の小学校で行われた四校運動会は、移住してきた生徒にも楽しい行事であったことだろう。

移住して半年から一年足らずで、人々がそれぞれ家を作るようになった。畑作物もさつまいもと菜種へとだんだん開墾していった。このころになると、菜種・炭が唯一の収入源であったため、炭を馬の背にのせ、浜津脇付近まで売りに出かけた。

二・三年後からそれぞれが鹿児島へと引き上げ始め、また二・三年すぎるとその数も半分近くなった。そのあとに徳之島・沖之永良部から来た人々が土地を買い上げ入植し

た。その後、昭和十年（一九三五）ごろから、奄美大島からの移住者が急激に増え、現在は大半が奄美大島出身者であり、初代の桜島移住民は、わずか四戸だけである。



移住者を受け入れた長屋跡現在の様子

## 第八節 戦争と疎開

令和二年（二〇二〇）に行った聞き取り調査の中から、戦争と疎開に関する部分を抜粋し、以下掲載する。

話者 万波集落 大山久男氏

太平洋戦争の終戦間近の事である、万波集落近くを流れる「鍋割川」沿いの国有林に兵隊の駐留小屋と防空壕があり、中将閣下（近衛の次官・少尉の上の位）や少尉など、多数の兵隊がいた。その近くの橋のたもとには製材所もあり、主に軍需用に製材していた。

万波集落から鍋割川に向かう途中の坂を鍋割坂と言うが、その坂に差し掛かる左手の山中には疎開（避難）小屋と呼ばれる建物があり、何か物資の運び込みが行われていた。

集落内に平成二十七年（二〇一五）にできた「NPO法人こすも」に隣接する山林内にある「行幸記念碑」に使っている大きな石は、近くの谷から集落民総出で引き上げて建てたもので、近くに集結し活動する兵隊を激励に訪れた「勅使」（天皇の使い）に恐れ入り、感激して建立した、と刻している。

話者 千段峯集落 野村末義氏

激しさを増す太平洋戦争の中で六年生になった私は、二年生以上の全児童と共に大口市山野の小木原集落その他に学童疎開をした（戦禍を逃れるための国策）。

一時（数カ月）受け入れてくださった家庭では戦時下の大変な時勢にもかかわらず、とても温かく接して頂いた。

その後、公民館らしき所で集団生活となり状況は一転、ひもじい思いをするこ

とが多く、子どもたちで原野を開墾し、カライモを植え食糧にしたが空腹は満たされなかった。元来漁具の手作りが得意だった私は、オオヅキ（モリ）を作り川魚を捕って食べた。

そんな中、はやり病にかかる人もいて手厚い治療をして頂いたように思うが、残念ながら数人が亡くなった。

一年ほどして終戦を迎え、帰郷。中学校は安城、一二キロほどの遠距離、また、終戦直後の乱世ゆえ、どの家も一様に衣・食・住に乏しく、子ども同士の人間関係もすさみ、喧嘩や暴力は日常茶飯事で苦悩や挫折、決して穏やかな日々ではなかったが、得意の海で素潜り漁することに生き甲斐を感じていた。



鍋割の壕

第七節 人 物

向井喜之助

中割校区の発展に貢献した人物として、向井喜之助が挙げられる。『種子島碑文集第二集』を参考に、彼の功績を紹介する。

氏は、明治十九年（一八八六）十月南種子村平山に生まれる。大正五年（一九一六）一月に西之表町十六番に転住し、農林業に従事した。また、日夜地区民と協働して、中割地区の発展に努力した。昭和四年（一九二九）に、地区民の強い支援により、町議会議員に当選し、中割区制の施行・実施、農林産業開発に尽力した。

昭和十一年六月五十一歳をもって永眠。氏の功績をたたえ、同十三年四月に紀徳碑を建立した。

向井喜之助氏紀徳碑

- ・ 所在地：十六番、県道沿い（十六番公民館横）
- ・ 建立：昭和十三年四月四日
- ・ 碑文（抜粋）：南種子町平山より移住し農林業に従事、区民の支援により西之表町議会議員に当選、区制の施行・実施等々、日夜地区の発展に尽力した。



紀徳碑説明版



向井喜之助氏紀徳碑

第八節 年中行事

- 一月一日 月讀神社元旦初詣
- 七月末 月讀神社六月灯
- 九月 校区敬老会
- 十月 校区運動会
- 十一月末 月讀神社秋の大祭

第九節 伝説

血染めの石

草角力の優勝者河野又四郎と恋仲になった安城の地頭の娘安姫は、ある日万波での又四郎との逢瀬の帰りに、身分違いの恋に反対する父親の命を受け、待ち伏せしていた家臣に斬りつけられ、ここ岩渡瀬の谷川で傷を洗っていたという。その後、再び戻った家臣がとどめを刺し、一方又四郎は悲しみのあまり自害した。安姫が流した血で川の石が赤く染まっていたという（『ふるさと歴史散歩』）。

鍋割坂

あるとき、正月の買い出しに行った村人が、急勾配の「鍋割坂」を登り終え一服し



鍋割坂



岩渡瀬の谷川



十六番集落の里いも畑

ようとしたりとき、背負っていた鍋が落ち、急な坂道を転がしていき、買ったばかりの鍋が割れてしまった。この逸話から、鍋割坂と呼ぶようになった(話者 万波集落 大山 久男氏)。

### 十六番の里いも

昔、中割地区は炭焼きが盛んで、中種子町方面からも炭焼きに来ていた。その人たちから、十六番のサトイモはほかのサトイモより美味しい、と評判になっていた。

## 第一〇節 史跡、神社仏閣

### 一 石碑に見る中割の足跡

中割地区は、大正三年(一九一四)一月一二日の桜島大噴火で罹災した人々二〇六戸・約一三三〇人が同年三月以降移住している。

また、ほぼ同時期に全国様々な地からの移住もあり、当時はほぼ人跡未踏の地であった林野を切り開き、かやぶき小屋で雨風をしのぎ、血のにじむような苦難の下にこの地が興されている。

ここでは、前節までに既出の「桜島移住記念碑」「向井喜之助紀徳碑」以外の石碑を紹介する。

#### 十六番行幸記念碑

- ・ 所在地…十六番、県道沿い(十六番公民館横)
- ・ 建 立…昭和十年十一月
- ・ 碑文(抜粋)…建設奉仕者、男女青年十六番・砂中支会、国防十六番婦人会

#### 万波移住記念碑

- ・ 所在地…万波、旧村山商店前市道沿い
- ・ 建 立…大正五年四月十三日



十六番行幸記念碑



万波移住記念碑



万波行幸記念碑

・碑文(抜粋)：万波集落に奄美大島・徳之島・与論・四国・宮崎などから多くの移住があり、集落の発展に尽力したので建てた。

て御神徳があるという。

七尋五葉松の自生地の碑

・所在地：万波集落から立山方面へ三キロメートルほど進んだ市道

沿い

万波行幸記念碑

・所在地：万波、NPO法人こすも敷地下

・建立：昭和十年十一月

・碑文(抜粋)：大演習御統監行幸・勅使本島御差遣・恐惶感激記念、萬葉小組合

・建立：昭和三十三年七月二十日

・碑文(抜粋)：樹齢約五〇〇年、幹回り約一二メートル、樹高四二メートル、枯れたため昭和二十二年に伐採した。

月讀神社

・所在地：十六番(県道を古田方面に向かい十六番集落のはずれの県道横)

・建立：不明

・碑文(抜粋)：武の神、子を授かる神、健康に成長する神とし



七尋五葉松の自生地の碑



月讀神社

## 二 神社仏閣

### 月讀神社

中割地区は、大正三年の桜島の大噴火のおり罹災した人々によって開拓された新興の地であり、出身地（鹿児島郡桜島町横山）に祀られている月讀神社の分社をこの地に新築して信心しているものである。月讀神社は、桜島の総産土神様で、御祭神は月讀の命である武の神・子を授かる神・健康に成長する神として、ご神徳があるといわれている。

## 第一節 郷土芸能

中割校区には、現在まで伝わる郷土芸能らしきものが存在しない。桜島噴火によって移住してきたことから、当時は生きていくことに必死であり、また桜島噴火による移住以外は島外の様々な土地から小規模での移住によって校区ができてきたため、郷土芸能の伝承等につながらなかったのではないかと推量される。郷土芸能ではないが、それに代わるものとして、「鴻峰小唄」と「鴻峰小学校校歌」の歌詞を掲載する。

### 鴻峰小唄

（作詞：平山 武章 作曲：国岡 保 振付：中割婦人会）

- 一 胸の煙りも炭焼く山も 桜島からうつしたこの火  
呼べば応える心に燃えて はずむ思いも幼などし  
鴻峰みながつちりどんと 降ろうが吹こうが気は晴れる
- 二 万波島に笑顔が咲いて 草の波間に親牛仔牛  
声も明るく木だまをかえす 今じゃ自慢のめでた節  
鴻峰みながつちりどんと 降ろうが吹こうが気は晴れる
- 三 小手をかざせば種子屋久一目 めぐる潮路の光に映えて  
屋根にそびえるアンテナ見では 偲ぶ七尋五葉の松  
鴻峰みながつちりどんと 降ろうが吹こうが気は晴れる
- 四 さやく蔗きびの葉緑の麦も なんの中割情けの深さ

かおる緑の土ふみしめて 立つ名嬉しい願成就  
 鴻峰みながつちりどんと 降ろうが吹こうが気は晴れる

鴻峰小学校校歌

- 一 黒潮しぶく南の 種子島ねの頂に  
 大正三年の噴煙で 礎なりし学び舎は  
 希望の光映える窓 われらの誇り鴻峰校
- 二 れい明告ぐる中割は 視界は広し犬城と  
 七尋五葉の音も高く 美まし園生は三州の  
 黄金の波に愛と汗 ともに手をとる鴻峰校
- 三 緑の高峰吹く風に 文化のかおりただよいて  
 平和の郷土に花とさく 学びの道にいそしみて  
 強く正しく生きぬかん 永久にはばたけ鴻峰校

第二節 年 表

和暦(西暦)		中割校区のひかり
大正	3年(一九一四)	三月十二日、桜島大正噴火による移住の第一陣として、西桜島横山・赤生原集落より三〇戸(二八一人)が十六番に到着する 十一月、桜島移住児童のため、県の援助により、中割に当初二学級の小学校を新設、鴻之峯小学校と称す
昭和	8年(一九三三)	安城区から中割区が独立
	20年(一九四五)	六月、種子島独立混成一〇一〇九部隊、(部隊長千田中将)一万二〇〇〇人、古田の中割地区に駐屯、町民を動員して、同鍋割地区に陣地の構築始まる
	25年(一九五〇)	中割千段峯に一一戸入植、上之峰組合として発足(二八戸)
	27年(一九五二)	奥嵐に一〇戸、千段峯に四戸入植
	29年(一九五四)	十月、中割千段峯に二戸入植
	49年(一九七四)	一月十六日、中割で住宅火災二棟全焼
	57年(一九八二)	三月二十八日 生姜山地区集会施設落成式
	60年(一九八五)	十月八日、老人福祉バス運行(中割―古田―西之表)
	63年(一九八八)	九月十三日、中割分団小型動力ポンプ付積載車配備

平成	和暦(西暦)	中割校区のびかりん
2年(一九九〇)	六月十一日、缶ジュース(時計草)工場落成(中割)月産一三万本	
12年(二〇〇〇)	三月二十二日、鴻峰小学校休校式	
14年(二〇〇二)	一月十三日、中割校区巡回スポーツ大会 六月九日、第一八回市消防操法大会小型ポンプ車の部優勝・中割分団	
16年(二〇〇四)	六月六日、第一九回市消防操法大会小型ポンプ車の部優勝・中割分団 十月、平成十二年休校の鴻峰小学校で第二回鴻峰ふるさと交流大会開催(中割校区主催)	
18年(二〇〇六)	七月十六日、第二〇回市消防操法大会小型ポンプ車の部優勝・中割分団県大会出場	
20年(二〇〇八)	六月八日、第二一回市消防操法大会小型ポンプ車の部優勝・中割分団	
21年(二〇〇九)	六月二十一日、市消防操法大会(第三回団長杯)小型ポンプ車の部優勝・中割分団	
26年(二〇一四)	六月一日、第二四回市消防操法大会小型ポンプ車の部優勝・中割分団 八月三十一日、鴻峰小学校閉校 十月二十六日、桜島移住中割一〇〇周年記念事業	
27年(二〇一五)	十一月十一日、旧鴻峰小学校のヤクタネゴウ伐採 十二月、中割プロジェクトチームの立ち上げ、老人クラブの再編(楽笑会)、お母さんパワーの組織化(どんと会)、長らく途絶えていた校区運動会の復活(鴻峰小唄も復活) NPO法人こすも万波集落に新築移転し活動開始	

令和	和暦(西暦)	中割校区のびかりん
元年(二〇一九)	十一月、毎月一回ペースで食農セミナースタート	
3年(二〇二二)	一月二十二日、株式会社ウルトラエックス(東京のIT系企業)・株式会社川商ハウス・中割区が地域活性化包括連携協定を締結した	
4年(二〇二二)	四月一日、株式会社ウルトラエックス種子島事業所が中割で業務開始	
30年(二〇一八)	買い物支援(生活必需品の委託販売開始)	
29年(二〇一七)	十月一日、中割地区地域活性化交流拠点施設「こうのみね館」開所式(旧鴻峰小学校)	
28年(二〇一六)	国庫事業「過疎地域等集落ネットワーク形成支援事業」を導入し、多用途の新たな学び舎として旧鴻峰小学校を改修	

暮らしの風景写真



大雪が降った日（昭和38年頃）  
（前田秀夫氏提供）



炭焼き小屋（戦前）



敬老会の様子



田植えの様子（昭和30年代）  
（前田秀夫氏提供）